

わが聲の五十となりぬいかのぼり 風

藤田湘子

昭和五十一年、「一月十一日」の前書があり、湘子五十才の作である。この年、自宅を新築、掲句が所収されている第五句集『春祭』のあとがきには「多摩朴下亭にて」とある。

人生の節目を感じる年が一生のうちに三度あるとすれば、三十、五十、七十ではなかるうか。その時々感慨深い思いにかられるが、「人生五十年」といわれた当時の五十は、その思いひとしおであろう。エネルギーみなぎる心身の中、おのが声にかすかな老いを感じたのか、それとも、円熟味を増した艶のある声に自得の笑みを浮かべたのか、解く鍵は季語「いかのぼり 風」。目出度さと、風まかせの頼りなさに、壮年湘子の感慨にたどりつく。

1976年（S51.01.11作） 第五句集『春祭』 鑑賞・野本京